

# 佛舍利奉安法会

於 南京牛首山 平成廿七年十月廿八日

則竹 秀南

九時四十分発MU七三〇便にて上海へ着く。十一時すぎ入国すれば、李賀敏氏及び無錫の湯氏、更に南京市より三名の迎えあり。軽食ラーメンをよばれて、一時前出発南京へ五時前に着。クラウンホテルに安単し、五時十分より主催者南京市、中国仏教協會の会見あり、支度して会見場に行く。仏教協會関係者、在家の人々約二十数名程の中、南京市 瑞林市長、蔣中国国家宗教事務局副局長、学誠中国仏教協會会長等入場し、各々今回の仏舍利奉安の意義を語る。了って、記念撮影をして、別室にて約三百名程の招待者である記念パーティーがあり、八時すぎ終宴する。

翌二十八日、朝八時十分出発にて牛首山へ。秋晴れの爽快なる朝である。雲一つない碧天の下、南京市内を通り郊外へ少し出ると、山の中腹に九重の塔が見える。車で約三十分、山のふもとに来ると信者さん達が整列し太鼓の鳴る中、獅子舞いで一同を歓迎する。その前を車にて通り約十分上り坂を塔の下まで上ってくる。南広場の下に到着。台傘で紫衣袈裟をつけて行列に入り、階段を上ると南広場となり、



更に、円形の外観は近代的な広大な建物の中に入る。しばらくして、更に中に案内され、エレベーターにて下に降りる。地下宮殿の大きな円形の部屋の中央に須弥壇が設けられ、その中央に蓮華台があり、佛舍利を御安置する所だと思う。多くの僧達も驚き乍ら一巡したり、記念の写真を撮ったりして約四十分、時を過す。十時前、学誠会長等二人の南伝と



チベットの副会長とが入場し、中央須弥壇の上に上る。丁度十時に佛頂寺にて市及び省の僧侶によって（二〇一〇年に南京にて発見発掘された佛舍利は）市内栖霞寺に仮安置されていて、今日奉迎する行事が仏頂寺にて行なわれて三名の代表者によって奉持されて入場。学誠会長の手にて奉安される。その後、列の如く衆僧の読経となる。仏縁により中央九人の導師の一人として選ばれて導師をつとめる。この勝縁は如何



に説明すべきか。多くの日本の高僧の中で唯一人、今このすばらしい盛典に出会い導師の位席に立っている有難さに涙する。経中、勿体なくも九人の導師と共に三拜を二回くり返し、大悲咒、般若心経を誦する。後列にはホール内、約五百名の僧俗が立誦し、十

時三十分すぎ無事円成となる。それより上り、エスカレーター六回程乗り換えて外に出ると南広場である。空の青さは、更に鮮やかに、秋の日はさんさんと輝く、方に佛光普照である。式典の会場に案内され、上壇二列目に坐る。一方は蔣副局長以下、蘇省副知事、南京市長等役人四十名程、一方は学誠会長、星雲長老以下僧侶四十名程が席につき、十一時より式典開始。開会挨拶後、来賓の紹介があり、南京市仏教協会会長栖霞寺住持の挨拶からはじまり、星雲長老、学誠会長、南京市長、蔣副局長等、佛舍利に因む話しと共に牛首山の風光秀美さをたたえた人民の安らぎの場としての景勝地である主旨等あり、最後に代表者による開場が行なわれて十一時すぎ式典は円成する。牛首山は曾って、牛頭禪の牛頭法融禪師が住持の地である。禪家にとって達磨大師より伝法され、後世、天下を風靡する禪の初期、祖師禪の礎を形成された方である。四祖道信禪師が牛首山に法融禪師を訪ねられて、問答も残っている。この地を訪れられた尊い仏縁が自分の一生の歴史の中に固く刻まれた一日であった。

牛首山佛舍利奉納	於 南京	十月二十七日
舍利奉安牛首山	靈光暉煜四維間	
衆僧俱拳摩訶法	家國興盛佛教殷	

偈成	於 式典	十月二十七日
風光秀美自然豊	舍利奉安霜葉紅	
僧俗五千牛首頂	九重大塔聳青空	